

2020年6月7日（日）久宝教会

メッセージ「その道をあなた方は知っている」

牛田 匡 牧師

聖書 ヨハネによる福音書 14章 1-14節

今日は約2ヵ月間、10週間ぶりに、この場に皆が集まることが出来ました。今年は新型コロナウイルス感染症の感染予防のために、イースターもペンテコステも、教会に皆で集まることが出来ないというこれまでにない対応をとって来ました。多くの商店や企業が休業し、学校や保育園なども休校や休園になり、子どもたちも大人たちも「おうちにいよう」「不要不急の外出をやめよう」と言われ、大変苦しい生活を送って来ました。感染拡大の状況が下火になって来たので、経済活動も、学校なども、少しずつ再開されつつありますが、北九州市では感染の「第2波」が発表されていますし、東京都でも「東京アラート（警報）」が発令されています。まだコロナは収束していない、感染の予防が求められています。

そのような状態で3月から過ごして来ている私たちですが、皆で集まることの出来なかったこの2ヶ月間は、教会にとっても、「教会とは何か」「礼拝とは何か」ということを、改めて問い直された時だったのではないかと思います。「教会（エクレシア）」という言葉は、もともとの意味は「集会」「集まり」という意味ですから、人々が集まってこそその場所であるわけです。「二人または三人が私の名によって集まる所には、私もその中にいるのである」（マタイ 18:20）と聖書にある通り、一人で聖書を読み、一人で神様に祈るのではなく、二人や三人、またそれ以上の人たちが集まって、共に神様を礼拝するということが大切だとされて来ました。しかし、それが出来ませんでした……。「どなたでもどうぞお越しください。歓迎いたします」ということを看板にしている教会にとって、「感染の恐れがあるので、どうか来ないで下さい」ということは、実におかしなことでした。矛盾していると言うだけではなく、その存在の必要性自体を自ら否定しているかのようにも思えました。

そのような中で、多くの教会が週報やメッセージを配布したり、インターネットで礼拝を中継したりすることを始めました。私たちも、4月の半ばから中継配信を行って来ています。素人の手探り状態からのスタートでしたが、実際に配信を行ってみると、この周辺地域に住んでおられる教会員の方々だけではなく、遠くに住んでおられる方々も、イン

ターネットを通じて私たちと共に礼拝に臨んで下さっている方々がいるということが分かりました。それは全く予想していなかった嬉しい誤算でした。このことを通して教えられたのは、教会とは人と人とが「集まる」時間と空間というだけではなく、「つながる」所でもあるのだ、ということでした。たとえ距離が遠く離れていても、たとえその場に自分一人しかいなくても、私たちは「誰かとつながっていることが出来る」「決して孤独には終わらないでいることが出来る」のではないのでしょうか。

今回の聖書の箇所は、イエス様が逮捕され十字架につけられる前に、弟子たちとの食事、有名な「最後の晚餐」の場面で、イエス様が弟子たちに話された話の一部分です。イエス様は弟子たちに「もうすぐ自分はここからいなくなる」という話をしてしています。1節からですが「心を騒がせてはならない。神を信じ、また私を信じなさい。私の父の家には住まいがたくさんある」。この後も、「もしなければ」とか、「あなたがたのために場所を用意する」とか、ややこしい表現が続いていますが、要するに「神の下に、あなたがたの居場所がある。だから安心していなさい」という一言に尽きるでしょう。そして4節「私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」と言われました。

しかし、弟子の一人であるトマスは言いました。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうして、その道が分かるでしょう」。思い返してみると、イエス様も弟子たちも皆、生まれも育ちも貧しく賤しく、社会の中で差別され、のけ者にされていた人たちでした。どこにも自分が居てよい「居場所」が見つけられなかった人たちでした。周囲から一人前の人間とは見てもらえず、罪人と見なされていた人たちでした。その人たちに「私たちも皆、神様から大切にされている存在なんだ」と伝え、一人の人として接してくれたのが、イエス様でした。そのイエス様が、もうすぐどこか遠くへ行ってしまおう……。しかも、「自分について来なさい。その道はもう知っているから」と言われても、トマスや弟子たちにしてみると、「どう行ったらいいのか、そんな道は知りません」急に不安になったことでしょう。

それこそ、何か初めてのことに挑戦する子どもに、「大丈夫、大丈夫。やってみたら、出来るから」と声を掛ける親に似ているのでしょうか。イエス様は言われました「その道をあなたがたは知っている」……。さて、ここで言われている「道」とは、どんな道なのでしょう。6節では、

有名な言葉ですが、イエス様は「私は道であり、真理であり、命である」と言われています。「私が道である」「私を通して行きなさい」……。日本語でも「道（みち／どう）」という言葉には、「生き方」や「あり方」という意味がありますが、ここで言われている「道^{みち}」とは、まさにイエス様はその身をもって示された生き方、あり方のことを指しています。ですから、ここでイエス様が言われているのは、言い換えるならば「私があなたがたと共に歩いて来たように、あなたがたはこれからも歩いて行きなさい」ということなのでしょう。

7 節では、「あなたがたが私を知っているなら、私の父をも知るであろう。いや、今、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのだ」と言っていて、「あなた方はこれから父を知るだろう」ではなく、「もうすでに知っている。すでに見たのだ」と言われています。これは「イエス様とこれまで共に歩いて来た中で、イエス様の言葉とふるまいを見て来た、生き様に触れて来たでしょ」ということなのでしょう。そしてそれこそが御父、父なる神の姿に他ならないのだとも言われています。

当時のイエス様も弟子たちもそうでしたが、ヘブライ語聖書に記されているユダヤ教の神、世界を創られた父なる神は、目には見えない存在、見てはいけないお方として考えられていました。しかし、見ないと信じられないというのは、いつの時代でも人の常だったでしょうし、神殿にお参りに行って沢山のお金を献金して、様々な儀式を執り行ってもらった人は、自分と一緒にいてくれる神を感じられたかもしれませんが、貧しくて「神殿詣^{もう}で」もろくに行けず、また常に周りから蔑^{さげす}まれていた弟子たちにとっては、自分たちと一緒にいてくれる神なんて感じられたこともない、むしろ自分たちは神から見放された罪人だと感じていたのではないかと思います。そんな弟子たちと歩みを共にしてくれた方、イエス様。そのイエス様が「あなたがたは私を知っている。だから、私の父を知っている。すでに私の内に父を見たのだ」と言われたわけです。続く 8 節以降は、そう言われても、まだ合点がいかないフィリポに対して、「私が父の内におり、父が私の内にいる」ということを、丁寧に説明されている言葉になっています。

今日は教会暦では「三位一体主日」とされています。そのために、父なる神と子なるキリストが同じであることを示すこの聖書の箇所が定められています。とは言え、「父と子と聖霊」の三位一体といっても、よく分からないのではないかと思いますし、2000 年前の古代中東世界

における男性中心的な「親子・父子」関係が、その前提となっています。ですから、現代では「父と子と聖霊」の三者の関係性を、ジェンダーに配慮した言葉で表現する取り組みも始められています。例えば「見えない神、見える神、感じる神」や「創造する方、愛する方、守る方」などです。

これらは言い換えるならば、「たとえ目には見えなくても、神様はいつも共にいて下さっている」ということを、私たちに告げている表現であり、私たちはその神の姿、神のあり方を、この聖書に記されているイエス・キリストの歩み、言葉と振る舞いを通して、知ることが出来る。そしてそれを分かち合い、その歩みに従って生きるように押し出されて行く、それが週毎の礼拝の時なのだと思います。

今回のコロナ禍の状況の中で、当初から感じていたのは、この燃え盛る火によって、社会のあちこちで、これまで表面を取り繕って来たメッキが剥がされていく、ということでした。そして各国で都市封鎖や営業自粛などが行われ、経済は悪化し、失業者が増えています。日本でも職を失い、収入を失い、住まいを追われたという方々のことが報じられています。コロナで甚大な被害を受けているアメリカでは、人種差別に基づいて黒人が白人によって殺されたということに対する抗議活動が行われていますが、様々な要因が重なって暴動化している所も出て来ています。危機的な状況になると、現在の苦しい状況を誰か人のせいにする。誰かを自分よりも下に置いて見下し、自分は上にいて安心したつもりになる、という心理が働きます。日本でも同じです。様々な差別意識が顕わあらになって来ています。

願はくは、このコロナの火によって、単にメッキが剥がされるだけではなく、全てが坩堝るっぼの中に入れられて溶かされ、より純度の高い金属に精錬されていければ、このコロナ禍も単なる「災い」で終わらずに済むのだと思います。「その道をあなた方は知っている」……。私たちが歩むべき道は、2000年前にイエス・キリストが歩まれた道、その身をもって示された生き方です。そしてその道こそが、命へと至る真実の道、時間と空間をも越える真理だと、私たちは知っています。メッキが剥がされると、中身は一人では立っていることさえも、ままならないような情けない私たちですが、そんな私たちを呼び出され、集められたのは神様です。いつも共にいて下さっている神様によって、私たちは今日もここからその後に従う歩みへと、歩み出していきます。